民間団体の国際会議での役割

臼 井 俊 二
（日本野鳥の会保護部国際協力室）

会議において，欧米の民間団体（NGO）と日本のものの積極性が違う，日本のNGOは発言すら出来ない，という批判がマスコミ関係でとりあげられたことについて考えてみる。

事例研究

まず，欧米の自然保護団体が行っていたことを例にあげてみてみる。

① ロビー活動

イギリスの野鳥保護団体・英国鳥類保護協会（RSPB）の国際部長のアリステイアー・ガメル（Alistair Gammell）氏はイギリス政府代表と頻繁に話し会いの場を持ち，RSPBをはじめとするNGOの意見を伝え，時にはそれをイギリス政府案として会議で発表させていた。

② 会議中での発言

盛んに本会議，委員会で発言をし，時に決議に影響を与えていた。

検 証

上記のような事例から，日本の自然保護団体に向けて，「全く発言をせず情けない」などの批判があったが，事実として「発言がなかった」ことは認めるが，以下の理由から批判内容としては的はずれと考える。

① CITESに何回も出席して，ロビー活動などに精通したガメル氏から，会議前に以下の注意が日本の自然保護団体にあった。

a 会議中の発言することは，ロビー活動がうまく行かなかった時などに使う「最後」の手段。

b CITESは国家間の国際会議。NGOはオブザーバーとしての立場をわきまえ，慎重に行動する必要がある。

また，事例のようなロビー活動，発言には，欧米NGOの以下のような努力がある。

① 常にNGOは情報活動を行い，政府に正確な情報，資料を提供する。

② CITESについてよく勉強し，的確な発言をする。

③ 政府関係者と日頃から情報交換を行い，信頼関係を確立し，ロビー活動をするための良好な関係を作る。

これらのような土壌がない段階で，会議中ただ発言しても，どの政府も支持せず，最悪の場合は反感を買いかえって逆効果。日本では，残念ながらこのような面で，政府，NGOともにまだ発展途上。

今 後

今回の会議では初めて，日本野鳥の会が働きかけて非公式ながら政府代表と民間団体との意見交換の場が2回持たれた。

NGOはCITESに限らず，国際条約やその周辺事情をもっと勉強をすべきだし，日頃の情報収集活動，政府との情報・意見交換を通じて政府との信頼関係を築くべきである。

また，政府もNGOの活動をよく勉強し，政府もNGOをよい意味で「利用」すべきだと思う。